

## 自然災害の語り継ぎ（後編） ～災害の記憶を風化させないために～

玉野 絵利奈（AIG 総合研究所 研究員）

[本コラム（前編）](#)でもお伝えしましたが、AIG 総合研究所が協賛した「2020 世界災害語り継ぎフォーラム」が、阪神・淡路大震災から 25 年目の節目である 2020 年 1 月 24 日（金）～26 日（日）に神戸市で開催されました。このフォーラムは阪神・淡路大震災を契機とし、世界の大自然災害について語り継ぐ場を設けるとともに、「世界災害語り継ぎネットワーク」（英語名：TeLL-Net）という災害伝承のグローバルネットワークを活性化し、災害に強い社会を作ることを目的として開催されたものです。

フォーラムは、一般向けに被災体験を伝える場、災害伝承について学術的に議論を行う場、そして全ての発表内容を統括する場という 3 つのセッションで構成され、参加者の幅広いニーズに応えるものとなっていました。なお、フォーラムの様子は 2020 年 3 月 14 日の NHK E テレで放映されました。（番組名：震災の記憶をどう伝え活かすか「世界災害語り継ぎフォーラム」）

自然災害の語り継ぎには、実際の被災体験に基づいたリアリティを伝えることができるという良さがあります。そして、リアルな経験の中には災害被害を軽減するために役立つ知恵が盛り込まれていることが多く、自然災害に対してどのように備えればいいのかということを教えてください。フォーラムでは、阪神・淡路地区で行われてきた語り継ぎ活動が実践され、被災者の実体験を通して、参加者へ地震の恐ろしさと減災の知恵が伝えられました。

東日本大震災においても、災害伝承を活用した防災対策の有効性が示されています。例えば、三陸地方に伝わる「津波でんでんこ」という津波避難の伝承は、岩手県釜石市の小中学校児童が迅速に津波から避難することに役立ったと言われています。

しかし、先人たちは被災した時の経験をそのまま後世に伝えているため、語り継ぎは科学的正確さに欠けたり話が古くなったりするという課題があります。

フォーラムで紹介されたインドネシア、アチェ州シムル島に伝わる災害伝承歌でも、そのような課題が示されました。2004 年のスマトラ沖地震の大津波では、インドネシアの死者・行方不明者は 17 万人を超えたのに対し、シムル島での犠牲者は 7 名にとどまりました。シムル島では 1907 年に発生した津波の災害経験を歌にし、地震が発生したら迅速に高所へ逃げることを伝えていたからです。しかし、歌詞の中には海の水が「引いたら」高台へ避難するようにというメッセージがあり、津波の前に必ず水が引くわけではないことを考慮すると、将来の津波の際に逃げ遅れが発生する可能性は否定できません。

また、[本コラム（前編）](#)で紹介した「大地震両川口津浪記」石碑には、地震発生時に注意すべきことが記されていますが、その中には小船の上に乗って津波避難することを警告する文言があります。当時、大阪の市街地では堀川を利用した川舟による物流が行われており、余震を恐れる住民は川舟に避難していましたが、津波によって押し上げられた大船によって川舟は大破し、多くの被害者を出したそうです。しかし、川舟に避難することのない現代の住民にとっては、理解が難しくなってしまった警告でしょう。

語り継ぎの良さを生かしつつ、災害の記憶の風化を防ぎ後世に伝えていくためには、語り継ぎと防災教育とを適切に組み合わせることが有効です。（[アゴラ記事「震災から9年：「いざ」というとき避難しない人を動かすコツはあるか？」](#)参照）語り継ぎと防災教育は、それぞれの長所と短所を補完しあうことのできる関係にあります。一般に、防災教育は現代の状況に即しており、科学的で正確ではあるものの、堅苦しくてリアリティを感じにくいという課題もあります。そこで、語り継ぎのリアルさにより災害リスクを身近で切実なものとして強く意識づけることで、防災教育の効果を高めることが考えられます。例えば、災害の伝承碑（語り継ぎ）によって過去に実際に起きた身近な災害について考えるきっかけを与えたいうえで、ハザードマップの見方や、災害情報の確認の仕方などを教える（防災教育）といったフォーマットが考えられます。

そして、このような語り継ぎと防災教育の良い関係を保つためには、語り継ぎのリアルさが重要です。日本では過去に幾度となく災害を経験し、語り継ぎの試みが続けられてきたものの、「災害は忘れたころにやってくる」という警句にあるように、時間が経つにつれ、災害のリアリティが薄れ記憶が風化していく問題と闘ってきました。

フォーラムでは、災害の教訓を風化させず、リアルに感じ続けることのできる取り組みとして、ニュージーランドで行われている CEISMIC というデジタルアーカイブの取り組みが紹介されました。CEISMIC は 2010 年 9 月～2011 年 6 月に郡発したカンタベリー地震の記憶や経験を示すビデオ・音声・資料・写真などをデジタルに保存し、災害の教訓を将来の世代に伝え、レジリエントな社会を作ることを目的としています。

このように、過去に発生した災害情報をデジタルアーカイブで保存する取り組みは、日本では東日本大震災を契機に広がりました。例えば、「[国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（愛称：ひなぎく）](#)」は、東日本大震災に関する記録等を一元的に検索・閲覧・活用することを目指したポータルで、現在では 47 の連携アーカイブに収録されたコンテンツも検索できるようになっています（2018 年 12 月末時点）。そして、内閣府では災害情報のアーカイブ化の充実を目指し、「大規模災害情報の収集・保存・活用方策に関する検討会」を開催、2018 年 2 月にデジタルアーカイブの現状や課題、そして今後の方向性について取りまとめた報告書を発表しています。

このように、自然災害の教訓を持続的な方法で語り継ぎ、災害の記憶を将来の世代に継承していくことが、今後ますます重要になっていくと考えます。

(出典)

- 飯塚智哉、畔柳昭雄、菅原遼「洪水常襲地域に見られる災害文化としての言い伝え・災害伝承に関する調査研究」公益社団法人日本都市計画学会 都市計画論文集, P108, 2018
- 矢守克也「津波てんでんこ」の4つの意味」自然災害科学, 2012
- 東日本大震災復興構想会議「復興への提言：悲惨のなかの希望」(内閣官房) P2, P47, 2011
- 高藤洋子「コミュニティによる災害経験伝承と減災との関係の一考察—インドネシア・スマトラ島インド洋沿岸地域および諸島の事例を中心に—」立教大学アジア地域研究所, p246-249, p262, 2016
- 「1854 安政東海地震・安政南海地震」(内閣府) 平成 17 年 3 月
- CEISMIC Canterbury Earth Quake Digital Archive ホームページ (<http://www.ceismic.org.nz/>)
- 「大規模自然災害情報の収集・保存・活用方策の方向性について(報告)(平成 30 年 2 月 27 日公表)」(内閣府)

※本ドキュメントは保険もしくはその他一切の金融商品の販売、勧誘を意図したものではありません。また、本ドキュメントは具体的な特定の取引をご提案するものではなく、その実現性を保証するものでもありません。

※AIG 総合研究所(以下「AIG」と呼びます。)は、本ドキュメントの利用あるいは利用の結果に関して、その正確性、精度、信頼性などについていかなる表明および保証も行わないものではなく、その利用の結果については責任を負いません。AIG は、本ドキュメントがいかなる場所においても適切であり利用可能であることを表明するものではありません。AIG は、正確かつ最新の情報を本ドキュメントで提供しよう合理的な努力をしていますが、誤差・脱漏が生じる場合があります。

※AIG あるいは本ドキュメントの企画、作成または提供に関わるいかなる当事者も、お客様が本ドキュメントを利用したことあるいは利用できなかったことに起因する直接的、偶発的、結果的、間接的損害あるいは懲罰的賠償の責任を負うものではありません。

※本ドキュメントに掲載されている内容に関する権利は、AIG および AIG が利用許諾を得た著作権者に帰属します。無断で転用・複製・改変をすることはできません。